

くろ くさ

黒草第1・第2・第3遺跡

もと の ばる

しち の

本野原遺跡・七野第3遺跡

一大淀川右岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集一

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

くろ くさ

黒草第1・第2・第3遺跡
もと の ばる しち の
本野原遺跡・七野第3遺跡

—大淀川右岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集—

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、開発事業との調整の結果、現地保存が不可能な遺跡について発掘調査を実施します。現地調査で出土した遺物や作成された記録類は埋蔵文化財センターに搬入後、整理され発掘調査報告書として記録に残す作業を行います。

本報告書は、農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所が平成5年度から平成6年度の2カ年間に実施した大淀川右岸農業水利事業に先立って発掘調査した、田野町七野第3遺跡、黒草第1・第2・第3遺跡、本野原遺跡の調査記録です。七野地区遺跡群、黒草地区遺跡群とも縄文時代遺跡の宝庫といわれる田野町においても特に遺跡が密集している地域です。今回の調査はその周辺部を細長く調査したに過ぎず、遺跡の全容はあきらかにできませんでしたが、過去に行われた調査結果と併せて、本書を活用されることを期待いたします。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に感謝申し上げます。

平成12年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 田 中 守

例　　言

1. 本報告書は、農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所の依頼により、大淀川右岸農業水利事業幹線水路工事に先立って宮崎県教育委員会が実施した、宮崎郡田野町大字黒草字黒草に所在する黒草第1・第2・第3遺跡、同町大字元野字本野原に所在する本野原遺跡、同町大字七野字西ノ原に所在する七野第3遺跡の発掘調査報告書である。
2. 従米「黒草遺跡」と総称されてきた調査対象地は、田野町教育委員会の遺跡詳細分布調査によって、黒草第1・第2・第3遺跡と本野原遺跡に細分された。本報告書は町教委の遺跡区分に従っている。1971年の宮崎大学、1978年の県教育委員会調査地の大部分は本野原遺跡に属する。
3. 遺物の整理・実測・拓本は宮崎県埋蔵文化財センターの整理補助員が行った。その他の作業は石川と菅付が分担して行った。本書の執筆分担は石川（第I章1、3～第IV章）、菅付（第V章）、石川・菅付（第1章2）である。
4. 本書で使用した方位は第3図（真北）を除いて磁北である。標高は海拔絶対高である。
5. 調査の記録類、出土遺物等は宮崎県埋蔵文化財センター（神宮分館）に保管している。

本文目次

第I章 発掘調査の経緯と環境

1. 調査に至る経緯	1
2. 環境	2
3. 調査体制	2
第II章 黒草第1・第3遺跡	4
第III章 本野原遺跡	8
第IV章 黒草第2遺跡	11
第V章 七野第3遺跡	14

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)	1
第2図 黒草第1・第3遺跡周辺図及び調査区配置図 (1/2,000)	5
第3図 黒草第3遺跡調査区平面図 (1/200)	5
第4図 黒草第1遺跡調査区平面図 (1/200)	6

第 5 図 黒草第 1 遺跡第 10 区土層断面図(1/40)	6
第 6 図 黒草第 1 遺跡第 14 区東壁土層断面図(1/40)	6
第 7 図 黒草第 1・第 3 遺跡出土縄文土器・弥生土器(1/3)	7
第 8 図 本野原遺跡周辺地形及び調査区配図(1/1,000)	8
第 9 図 本野原遺跡調査区平面図(1/400)	9
第 10 図 本野原遺跡土層断面図①(1/40)	9
第 11 図 本野原遺跡遺構配置図(1/100)	10
第 12 図 本野原遺跡土層断面図②(1/40)	10
第 13 図 本野原遺跡土層断面図③(1/40)	10
第 14 図 本野原遺跡出土縄文土器(1/3)	10
第 15 図 黒草第 2 遺跡周辺地形及び調査区配置図(1/1,000)	11
第 16 図 黒草第 2 遺跡調査区平面図(1/400)	12
第 17 図 黒草第 2 遺跡上層断面図①(1/40)	12
第 18 図 黒草第 2 遺跡遺構・遺物分布図(1/100)	13
第 19 図 黒草第 2 遺跡土層断面図②(1/100)	13
第 20 図 黒草第 2 遺跡出土縄文土器(1/3)	13
第 21 図 七野第 3 遺跡周辺地形図(1/6,000)	15
第 22 図 七野第 3 遺跡トレンチ配置図(1/1,000)及び土層断面写真	16~17
第 23 図 七野第 3 遺跡出土縄文土器(1/3)	19
第 24 図 七野第 3 遺跡出土縄文土器・弥生土器(1/3)	20
第 25 図 七野第 3 遺跡出土弥生土器・近世磁器(1/3)	21
第 26 図 七野第 3 遺跡出土石器(1/3)	21

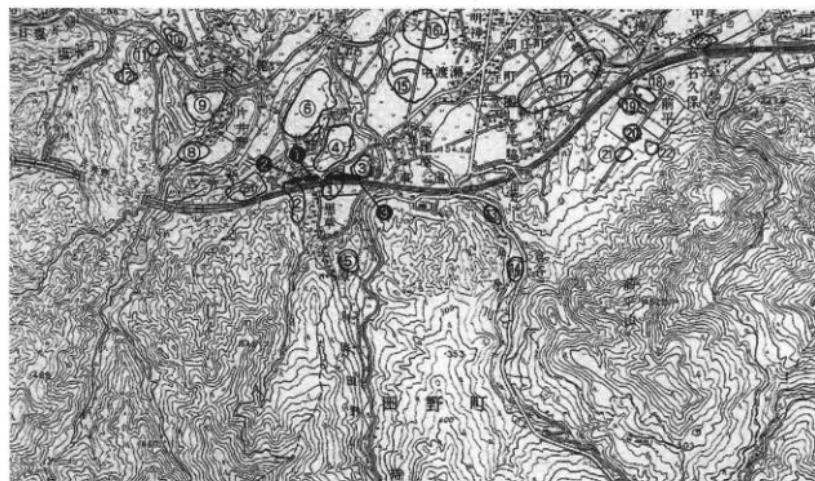
図版目次

図版 1 (1) 黒草第 1 遺跡・第 3 遺跡全景(北西から)	22
(2) 本野原遺跡調査区調査前全景(西から)	22
図版 2 (1) 本野原遺跡調査区全景(東から)	23
(2) 黒草第 2 遺跡調査区全景(西から)	23
図版 3 (1) 黒草第 1・第 3 遺跡出土遺物	24
(2) 本野原・黒草第 2 遺跡出土遺物	24
図版 4 七野第 3 遺跡調査状況及び出土遺物	25

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と遺跡の環境

1. 調査に至る経緯

宮崎県文化課と九州農政局宮崎農業水利事務所は大淀川右岸・左岸農業水利事業の実施にあたって、文化財協議を実施してきた。平成4年7月15日付けの平成5年度開発事業照会に対し、七野幹線水路工事実施の回答があり、当該工事区に所在する七野第3遺跡の取扱いについて協議した。平成5年5月27日に文化課、水利事務所、県中部農林振興局3者で行った現地協議の結果、路線変更が困難であるため工事部分について記録保存の措置を講ずることとなり、平成6年1月10日から2月7日まで発掘調査を実施した。5月の現地協議では、6年度の工事箇所についても併せて協議を行ったが、前平幹線水路において周知の埋蔵文化財包蔵地である黒草第1・第2・第3遺跡、本野原遺跡の一部が工事対象地であり路線変更も不可能と判断されたため、平成6年度に確認調査を実施することとした。平成6年6月2日から6日にかけて実施した黒草第1・第3遺跡、本野原遺跡の確認調査の結果、中世と思われるピットや縄文の包含層が検出されたため、平成6年7月4日から9月30日まで本調査を実施した。



- ①黒草第1遺跡 ②黒草第2遺跡 ③黒草第3遺跡 ④本野原遺跡 ⑤畠田遺跡
⑥高野原遺跡 ⑦本野原遺跡 ⑧片井野第2遺跡 ⑨片井野第1遺跡 ⑩七野第3遺跡
⑪西ノ原遺跡 ⑫井手ノ尾遺跡 ⑬倉谷第1遺跡 ⑭倉谷第2遺跡 ⑮崩ノ上遺跡
⑯南原遺跡 ⑰青木遺跡 ⑱又五郎遺跡 ⑲札ノ元遺跡 ⑳芳ヶ迫第1遺跡
㉑芳ヶ迫第3遺跡 ㉒芳ヶ迫第2遺跡 ㉓中尾遺跡
●本野原遺跡調査区 ●黒草第2遺跡調査区 ●黒草第1・第3遺跡調査区

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

2. 環 境 (第1図)

鷲塚山系北麓は標高およそ180m前後の火山灰台地が小河川に分断された形で、島状に連続している。台地の間を埋めるように、小河川による扇状地が広がって田野の盆地底に接続している。黒草第1・第3遺跡は、清武川の支流である別府田野川の形成した扇状地に立地し、黒草第2遺跡、本野原遺跡は別府田野川と元野川に挟まれた台地上に立地する。前者には水田が営まれ、後者では畑作が行われている。また、七野第3遺跡は、その北方の片井野川と松山川の間のシラス台地に立地し、同様に畑作が営まれている。

「黒草遺跡」与本野原遺跡（一部黒草第2遺跡が含まれる。）は1960年の遺跡発見以来、広範囲にわたる遺物散布が確認されていて、縄文土器のほか、多量の石鎌、石匙、石皿等が採集されていた。1971年に宮崎大学がその北端を学術調査し、1978年には、九州縦貫自動車道建設に伴って県教委がその南端を調査したが、いずれも小規模な調査で顯著な遺構等の検出も無く、遺跡の全体像を明らかにするには至らなかった。その後、今回の調査後1995年に県営農地保全整備事業に伴う確認調査が本野原遺跡全域にわたって実施され、アカホヤ火山灰層上下で集石遺構等の集落痕跡が確認された。過去4度の調査で、縄文時代早期、前期、後期、晚期の各時期に断続的に集落が営まれた状況が推測される。黒草・本野原遺跡の周辺では畠田遺跡や高野原遺跡で集石遺構など早期の遺構遺物と晚期の住居跡、土壙や遺物が、元野川内遺跡では早期から後期にかけての遺構遺物が検出されていて、いわば「元野・黒草地区遺跡群」ともいべき濃密な縄文時代の遺跡群を形成している。その有機的な構造等今後の解明を持つ部分が多いが、田野盆地地域では、盆地周縁部に同様な遺跡群の存在を幾つか指摘できる。早期貝殻円筒系土器、押型文土器、塞ノ神式土器など多彩に展開する札ノ元遺跡、芳ヶ迫第1遺跡、芳ヶ迫第2遺跡、芳ヶ迫第3遺跡などが含まれる「前平地区遺跡群」、早期を中心に後晩期まで見られる砂田遺跡、前畠第1・第2・第3遺跡などを含む「八重地区遺跡群」、早期から後晩期まで認められる長蔵遺跡、丸野第1・第2遺跡などで構成される「七野地区遺跡群」等がそうである。これらの遺跡群は、3～5km程度の間隔をおいて形成されていて、各々の領域等を考える上で示唆的である。

一方、七野第3遺跡は、前述の「七野地区遺跡群」に含まれる遺跡で、遺跡の北方0.4kmに七野第1遺跡が、1.2kmに丸野第2遺跡が立地する。また、北北西0.9kmには、前述の長蔵遺跡が位置するなど、同じ台地の縁辺部を中心に縄文時代を主体とする遺跡群が散在している。なお、国道269号を挟んで南西側に西ノ原遺跡が位置するが、これは七野第3遺跡と同一の遺跡であろう。

3. 調 査 体 制

調査委託機関 農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所

調査主体 宮崎県教育委員会 教育長 高山義孝（平成5年度）田原直廣（平成6年度）

篠山竹義（平成11年度）

平成5年度（七野第3遺跡発掘調査）

実施部局 文化課 課長 甲斐教雄 課長補佐 田中雅文

調査担当 埋蔵文化財第二係長 面高哲郎（総括） 埋蔵文化財第二係主査 石川悦雄（調整）
埋蔵文化財第二係主査 菅付和樹（調査）
庶務担当 庶務係長 稲山輝彦 庶務係主査 宮越 尊

平成6年度（黒草第1・第2・第3遺跡、本野原遺跡発掘調査）

実施部局 文化課 課長 江崎富治 課長補佐 田中雅文

調査担当 埋蔵文化財第二係長 面高哲郎（総括）
埋蔵文化財第二係主査 石川悦雄（調整・調査）

庶務担当 庶務係長 高山恵元 庶務係主査 宮越 尊 庶務係主任主事 横山幸子

平成11年度（整理及び報告書作成）

実施部局 宮崎県埋蔵文化財センター 所長 田中守 副所長 江口京子

整理担当 調査第二係長 青山尚友（総括） 調査第一係主査 菅付和樹（整理・報告書）
調査第二係主査 石川悦雄（整理・報告書）

庶務担当 庶務係長 児玉和昭 庶務係主任主事 上野広宣 庶務係主事 平田ユミ子

調整担当 県文化課埋蔵文化財係主任主事 重山郁子

第Ⅱ章 黒草第1・第3遺跡

調査の概要（第2図）

本野原の台地が別府田野川に緩やかに下降して行く斜面に黒草第1・第3遺跡が所在する。地形的には一連の遺跡と考えられた。確認調査では、別府田野川沿いの道路から数えて3枚目の圃場を1区とし、順次上方（西）に調査区を設定した。その結果1～3区及び、8～14区で柱穴や土器片が検出できたので、空白の4区～7区を遺跡境界とし、前者を第3遺跡、後者を第1遺跡と判断した。本調査は、各圃場の段差がきついこと、水路を撤去できないことから、各圃場に独立の調査区を設けることとした。

層序（第5図、第6図）

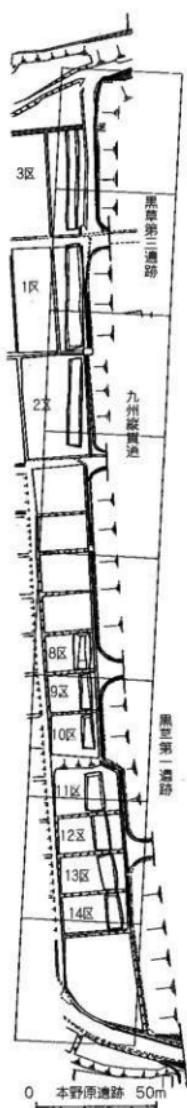
調査区全面で圃場整備による造成攪乱が見られた。アカホヤ火山灰層まで削平されている調査区もあり、部分的にはアカホヤ下層の段丘礫が耕作土下に検出される調査区もある。基本的な層位は10区（第5図）や第14区（第6図）に見るように、40cm程度の耕作土の下には50cm程度の造成土があり、その下層で黒褐色土、黒色土が検出でき、その下にアカホヤ火山灰層が堆積している。遺物は、主として黒褐色及び黒色土に包含される。遺構はアカホヤ面でようやく検出できた。

遺構（第3図、第4図）

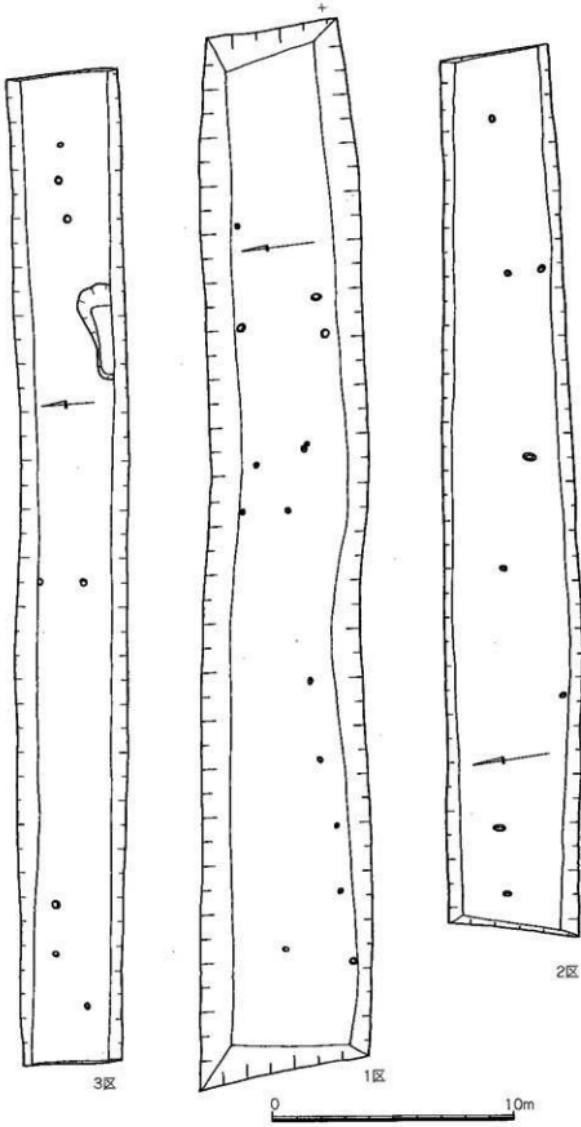
検出した遺構には土壙と柱穴群がある。第3遺跡では3区で、第1遺跡では9、10、12～14区で土壙を検出した。径が1m前後、深さが20～30cm程度の不整形を呈している。3区の土壙は調査区外に延びているが、底部で長さが2.5m、幅は調査部分で75cmの略長方形を呈している。出土遺物は縄文前期と晩期のもので、土壙埋土に混在しているため土壙の時期決定には使えない。柱穴は径15～20cm、深さは10～20cm程度のかなり削平を受けた小規模なもので、建物として並ぶ柱穴は確認できなかった。時期を示す遺物の出土も無く、層位的な確認もできなかった。柱穴群は黒草第1遺跡部分に集中する。

遺物（第7図）

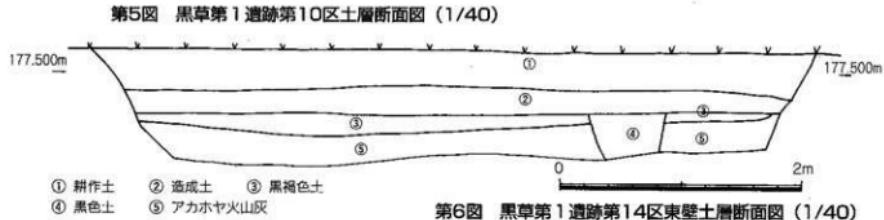
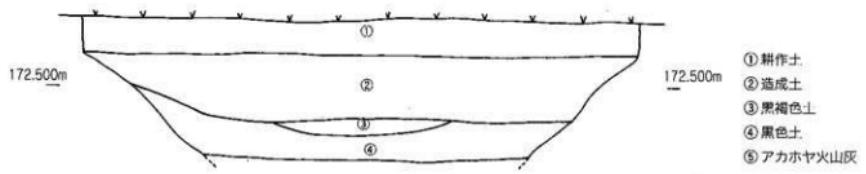
國化し得た遺物は16点の縄文土器片と1点の弥生土器片である。縄文土器片は主として11区のアカホヤ層上部にある黒色土及び黒褐色土層から出土した。1は10区から出土した早期の知覧式深鉢胴部片で、貝殻腹縁による斜位の連続刺突文が施されている。2は3区土壙から出土した精製された小型土器片で、外面は丁寧に横ナナアされた後に細沈線が2条施されている。曾畠式的な様相を持つが、顔料が施されておらず、胎土に滑石が認められないなど非曾畠式的な特徴も同時に認められる。とりあえず、前期に比定しておく。3は11区褐色土出土の深鉢胴部片で、ナデ調整の丁寧さやきれいな沈線の感じが曾畠的ではあるが、沈線が並行沈線のみで途切れていることや、無文部分があることなど納曾式的なところもある。4は丸尾式の深鉢口縁部で、波状口縁の波頂部に近い部分である。内面は斜方向の貝殻条痕上にナデ調整していく、外面は貝殻腹縁による斜位の連続刺突文が施されている。表採品である。5は11区黒褐色土出土の丸尾式かと思われる深鉢の胴部片で、貝殻腹縁による斜位のロッキングまたは連続刺突文が施されている。6は11区黒褐色土出土の深鉢口縁部片で、貝殻腹縁による斜位の連続刺突文が施されている。丸尾式あるいは納曾式あたりに比定できる。7は11区褐色土出土。波状にな



第2図 黒草第1・第3遺跡周辺図及び
調査区配画図 (1/2,000)



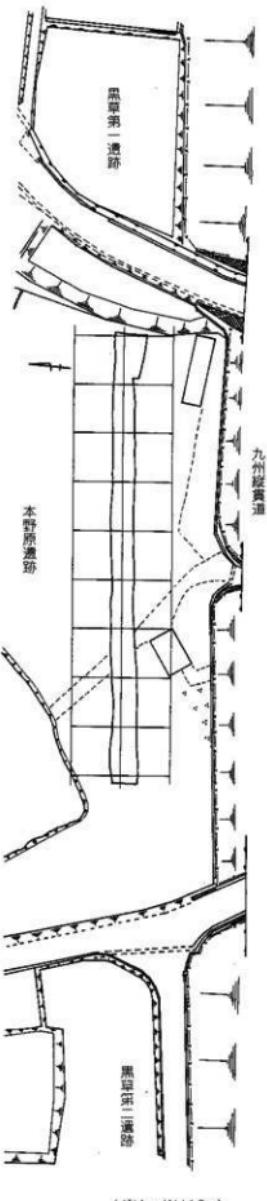
第3図 黒草第3遺跡 調査区平面図 (1/200)



状になる可能性のある納曾式深鉢の口縁部で、内外面とも丁寧にナデ調整されている。口唇部に2条の沈線が入る。8は11区黒褐色土出土の深鉢口縁部で、内外面とも丁寧に横ナデされていて、外面に貝殻腹縁で付けられたと思われる緩く弧を描いた連続刺突文が施されている。9は表採品で、深鉢の胴部片である。破片部位では、2条の沈線間と沈線の上位に繩文が施されている。納曾期位に位置付けられる。10は11区黒褐色土出土の深鉢波状口縁部である。内外面とも貝殻による条痕調整され、内面はナデ消されている。幾分肥厚した口唇部附近に2条の平行沈線が施され、その間に2つの刺突文が入っている。納曾期位に比定できる。11も11区褐色土出土の深鉢波状口縁部で、口唇部が欠損している。内外面とも貝殻条痕調整されたあとナデ消されている。幾分肥厚した口唇部附近に2条の沈線が施され、刺突文が1つ認められる。納曾期あたりに比定できよう。12は11区褐色土出土の深鉢胴部片で、内外面とも横方向にヘラ磨きされている。後期末から晩期前葉頃に比定できそうである。13は表採品の深鉢胴部曲部片で、内外面とも貝殻条痕後に横ナデ調整されている。晩期前半あたりに比定できる。14は3区土壤から出土した深鉢の口縁部片で、幾分肥厚した口縁と荒い横ナデを特徴とする。晩期中業位に位置付けられる。15は表採品で内外面とも丁寧に磨かれた晩期の浅鉢胴部片である。16は11区黒色土から出土した晩期の深鉢口縁部片で口縁帯が肥厚する。波状口縁の可能性がある。17は甕もしくは鉢胴部で、三角突帯に右上がりの押圧刻み目が施されている。斜位に押圧刻み目を施す甕は、下城式には殆ど存在せず、中溝式にもあまり認められないので、弥生後期後半以降に盛行する押圧刻目突帯甕もしくは鉢の可能性が高い。4区表採品である。



第7図 黒草第1・第3遺跡出土縄文土器・弥生土器 (1/3)



(グリッドは10m)

第Ⅲ章 本野原遺跡

調査の概要（第8図）

本野原遺跡は、黒草第1遺跡と道路を挟んで西側に隣接する。調査対象地は1978年に県教育委員会が、九州縦貫道建設に先立って発掘調査を実施した「黒草遺跡」の北側に隣接している。従って確認調査を省略して本調査を実施した。水路埋設溝幅で東西に約90mの調査区を設定した。ただし、対象地の西端は作物の関係で調査できなかった。畑地造成や耕作による削平はかなり激しく、アカホヤ層のかなりの部分がとばされており、調査は耕作直下の遺構検出作業に終始した。原位置を保っている遺物はほとんどみられなかったが、東端部はわずかにアカホヤ火山灰層上部の黒色土が遺存していて、そこでは数点の繩文土器片を検出できた。調査区のほぼ全面にわたって柱穴と土壤を検出したが、明確に建物と認定できるものは確認できなかった。また削平が激しく遺構の明確な時期についても明らかにしえなかつた。

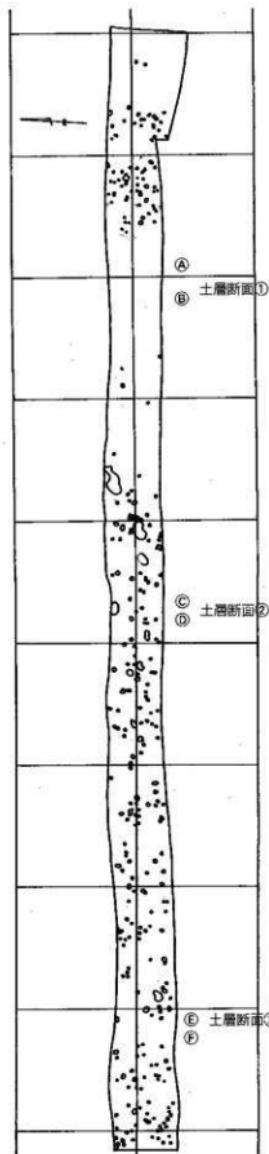
層序（第10・12・13図）

アカホヤ火山灰層から上は基本的に削平されていて、アカホヤ層の下層は白色バミスが混在する硬質な褐色土あるいは黒褐色土が堆積している。

遺構（第9・11図）

検出した遺構には土壤と柱穴群がある。土壤は径が50cm～1m程度の不整形なもので、深さは10～20cm程度である。時期性格とも不明である。柱穴は、径15～20cm、深さは10～20cm程度のかなり削平を受けた小規模なもので、調査区東の一群と中央部から西端の2つの柱穴群に分れるが、明確に建物として並ぶ柱穴は確認できなかった。時期を示す遺物の出土も無く、層位的な確認もできなかつた。

第8図 本野原遺跡周辺地形
及び調査区配置図 (1/1,000)



遺物（第14図）

検出された遺物は少なく、固化し得たものは調査区東端で出土した縄文土器3点のみである。1978年の東九州自動車道建設に伴う調査で表探していた遺物のうち、未報告であった、縄文晩期黑色磨研土器等5点を固化して掲載した。

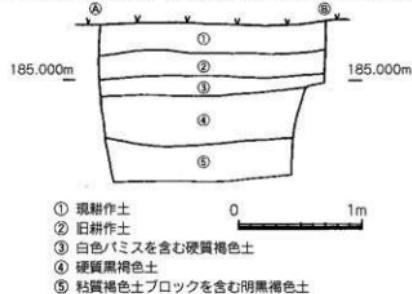
1994年調査縄文土器（第14図1～3）

1は無文の深鉢波状口縁部で内外面とも斜方向に荒くナデ調整されている。2は深鉢の胴部片で内外面ともナデ調整されている。3は深鉢の口縁部に近い削部片で、地はナデ調整され、幅1cm厚さ2mmほどの偏平な突帯に刻目がほどこされている。いずれの土器も時期比定が難しいが、2は調整や焼成の感じから晩期のものではないかと推測される。

1978年表探縄文土器（第14図4～8）

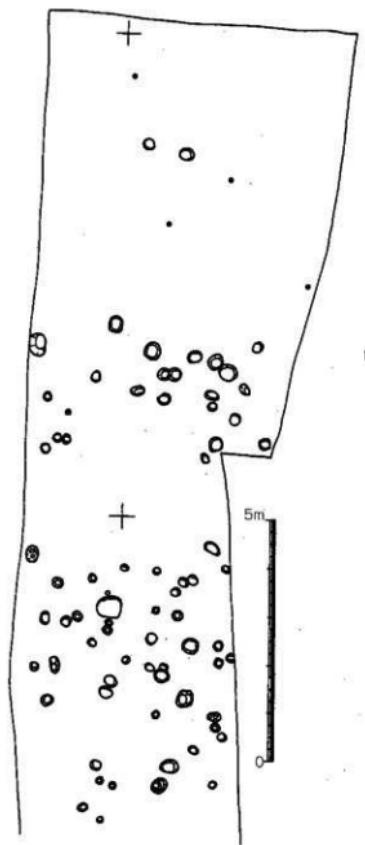
1978年の九州縦貫道建設に伴う発掘調査報告書に掲載されていないもののうち、縄文晩期の磨研土器片など5点を今回の報告書で紹介する。

4は深鉢の波状口縁部の波頂部附近である。地はナデ調整され、口唇部と口縁直下に2条の沈線が施されている。納曾期ぐらいの時期に比定できる。5は波状を呈すると思われる深鉢の口縁部で、内面は丁寧なナデ、外面は横方向のヘラミガキ調整されている。内面口縁直下に1条の沈線がある。時期的には太郎迫から三万田式あたりに比定できよう。6～8は磨研浅鉢の口縁部である。6は晩期前半、7は後期末葉から晩期初頭頃に比定でき、口縁直下に1条の沈線が施されている。8は軽く波状口縁になると思われるが、晩期前葉あたりに比定しておく。

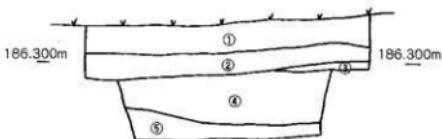


第9図 本野原遺跡調査区平面図 (1/400)

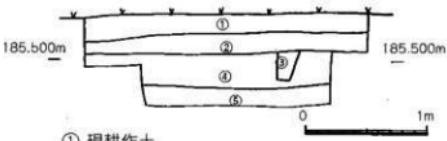
第10図 本野原遺跡土層断面図① (1/40)



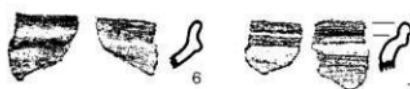
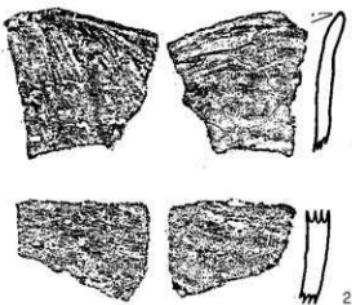
第11図 本野原遺跡遺構配図 (1/100)



第12図 本野原遺跡土層断面図② (1/40)
① 現耕作土
② 旧耕作土
③ アカホヤ火山灰
④ 白色バミスを含む硬質黒褐色土
⑤ 白色バミスを含む硬質暗黒褐色土



第13図 本野原遺跡土層断面図③ (1/40)
① 現耕作土
② 旧耕作土
③ 柱穴埋土の黒褐色土
④ アカホヤ火山灰
⑤ 白色バミスを含む硬質黒褐色土

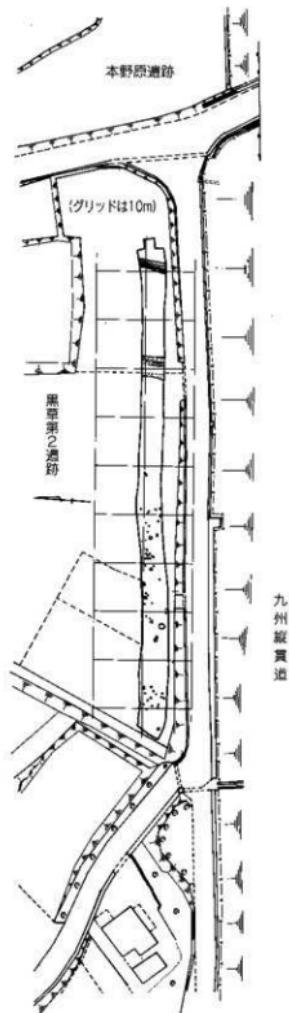


第14図 本野原遺跡出土縄文土器 (1/3)

1~3 本野原遺跡平成6年調査

4~8 黒草遺跡昭和53年表探

第IV章 黒草第2遺跡



第15図 黒草第2遺跡周辺地形
及び調査区配図
(1/1000)

調査の概要（第15図）

黒草第2遺跡は、道路を挟んで本野原遺跡に西接する。南側は東九州自動車道とその側道が走っている。

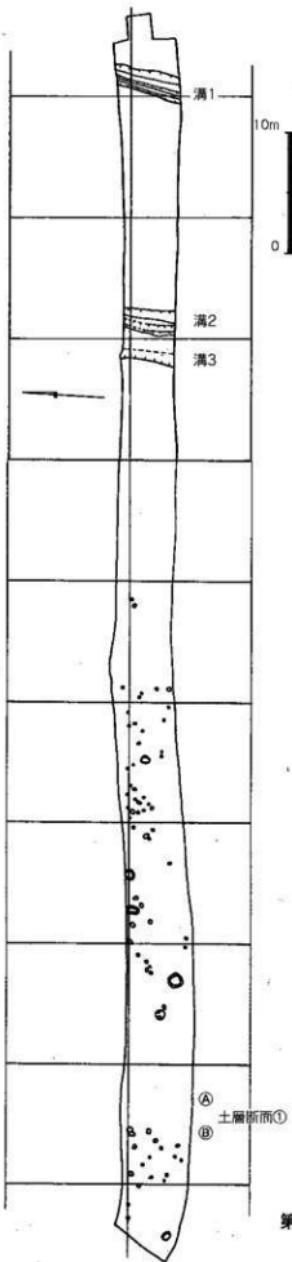
ほぼ1枚の畑地に東西方向へ長さ約100mの調査区を設定した。遺構の検出は耕作土除去後、アカホヤ火山灰層上面で行った。その結果、調査区東側で二条の溝に挟まれた落込み部を検出し、調査区中央から西側にかけて柱穴群を検出した。遺物は、オリジナルの文化層が依存していた、東側落込み部で確認できた。遺構に伴う遺物は検出できなかった。

層序（第17図、第19図）

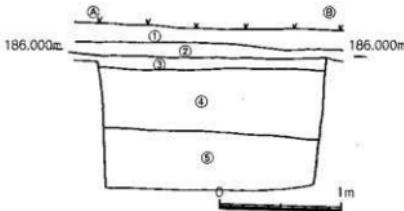
アカホヤ層の上層は耕作で削平されている。基本的な層序は30cm程の耕作土の下に10cm程度のアカホヤ層下部があり、その下に40~50cmの厚さの白パミス混じりの硬質黒褐色土、その下層に同程度の厚さの硬質褐色土が堆積している。

遺構（第16図、第18図、19図）

検出した遺構には溝と土壙、柱穴がある。溝は3条検出した。溝1は調査区の東端に南北方位で掘られている。その規模は幅が検出面で2m程度、中途にテラスを持ち、底幅は約25cmである。深さは現状で50cm程度と浅い。溝2、3は溝1とほぼ並行に約10mの間隔で掘られている。溝3が溝2を切っている。溝2の現存の幅は約2.5m深さは30cm程度である。溝3の規模ははっきりしないが、土層観察では幅約5m、深さが1m程度と推定される。溝の時期は明確にし得ないが、繩文後期包含層を切っていることは確實なので、それ以降の所産と判断できる。溝に挟まれた窪地の性格は、アカホヤ火山灰の傾斜等から谷等の自然地形に由来するものと考えられる、その浅い谷地形が、繩文後晩期以降のいずれかの時期に埋立てられ、畑地等利用されたものと推定される。両端の溝は、畑地などを区画するためのものだった可能性が高い。柱穴は、径15~20



第16図 黒草第2遺跡調査区平面図 (1/400)



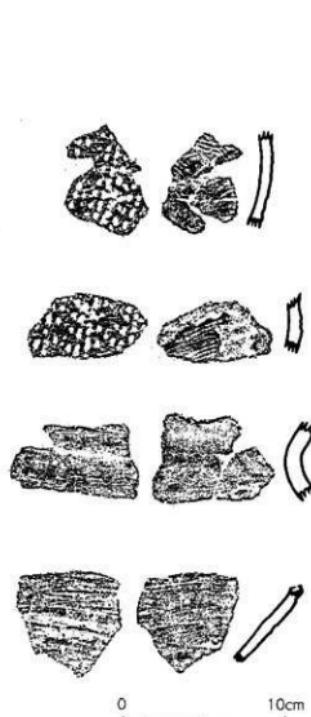
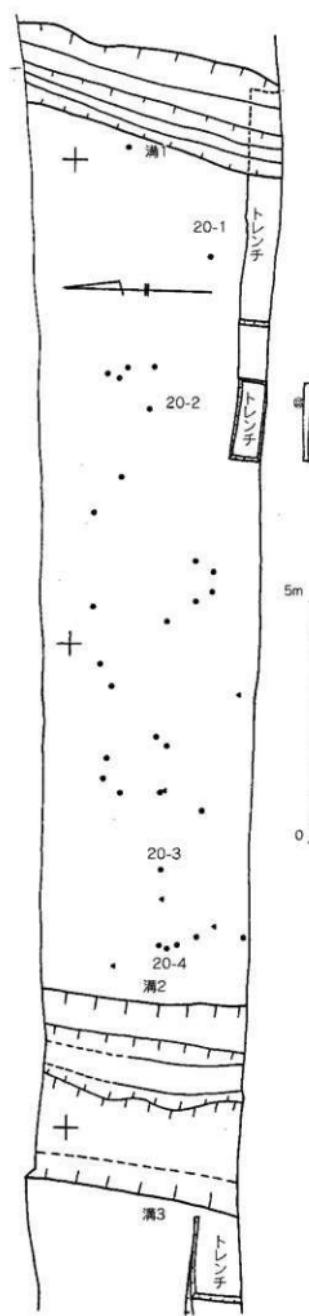
第17図 黒草第2遺跡土層断面図① (1/40)

cm深さは10~20cm程度のかなり削平を受けた小規模なもので、2つの柱穴群に纏めることができるが、建物として並ぶ柱穴は確認できなかった。時期を示す遺物の出土も無く、層位的な確認もできなかった。土壤は径が50cm~1m程度の不整形なもので、深さは10~20cm程度である。時期性格とも不明である。

遺 物 (第20図)

調査区東端の溝1と溝2・3の間の落込み部から約30点の縄文土器片及び剝片が出土した。岡化できたのは縄文土器4点である。

1と2は同一個体の可能性のある深浦式の胴部片で、内面が貝殻条痕調整され、外面は部分的に押し引き状になる連続刺突文(連点文)が施文されている。3は深鉢の胴屈曲部で内外面とも横方向にナデ調整されている。4は深鉢の胴屈曲部片で、内外面とも横方向にナデ調整されている。3、4とも晩期前半あたりに位置付けられる。



第20図 黒草第2遺跡出土
縄文土器 (1/3)

左 第18図 黒草第2遺跡遺構・遺物
分布図 (1/100)

- ①耕作土
- ②汚れた明黒褐色土
- ③より暗い明黒褐色土
- ④より暗い明黒褐色土
- ⑤黒褐色土
- ⑥白色バミスを含む硬質黒褐色土
- ⑦ボラ細胞を僅かに含んだ汚れた黄褐色土 (縄文土器包含)
- ⑧ボラを含んだ黄褐色土
- ⑨⑦と⑧の漸移層 (縄文土器包含層)
- 硬質褐色土
- アカホヤ火山灰
- 硬質黒褐色土
- 軟質褐色土
- 汚れた褐色土
- 汚れた黒褐色土
- 汚れた黒褐色土と灰のラミナ層
- 汚れた黒褐色土と灰のラミナ層
- 黒褐色土
- アカホヤブロックのまじった黒褐色土
- 汚れた明黒褐色土
- 汚れた黒褐色土
- アカホヤブロックの混じる汚れた黒褐色土
- 砂質黒褐色土

右 第19図 黒草第2遺跡土層
断面図② (1/100)

第V章 七野第3遺跡

1.はじめに

七野第3遺跡は、田野町教育委員会発行の遺跡詳細分布地図（平成2年）に記載された周知の遺跡である（遺跡番号3027）。調査対象地は、脇を水路が通る農道部分で、現況では周辺の畑や田より一段高くなっていた。当初、その法面の一部でアカホヤ火山灰層が確認され、その上層で弥生土器片と縄文土器片が採集されたこと、周辺は一段低く整然と区画された畑であったことなどから、この農道部分のみ削り残されて旧地形が残存しているものと考えられた。また、確認調査は、この農道が現在も使用中であったため行えず、農道付け替え後、平成6年1月10日から本調査に着手した。調査は、降雨が多くかったものの調査対象面積840m²に対し約540m²を掘って2月7日に終了した。

2. 調査の結果

今回の調査地は、宮崎郡田野町乙字西ノ原4161番地ほかに位置する。遺跡は、浸食されて間にいくつもの小谷に入る広大なシラス台地の南端部にあたり、大正9年の耕地整理で周辺は整然と区画された畑地帯となっている（第21図）。

調査は、重機による現道部分の剥ぎ取りから始め、アカホヤ火山灰層を露出させたところで遺物の散布を確認した。ところが、このアカホヤ火山灰層は、一次堆積のアカホヤ火山灰土のブロックとその風化土のブロックとが混在したもので、西端の水路側には黒色土も見られたため、対象地区的5ヶ所に道路を横断するトレンチを入れて層の確認をした。その結果、この層は縄文時代と弥生時代の遺物を含むアカホヤ火山灰風化土を主体とする客土であり、水路側から測道の方へとこれらの土を投げ込んだ状況が観察できた（第22図）。また、地元の人の話や遺跡近くの大正9年の開田記念碑から、この七野地区では、大正2年から9年にかけて開田と水利事業を行ったこと、その際、町境の天神地区の境川からなるばると用水を引いたことなどが分かった。そして、この用水は近くの国道を石橋で越えた際、勾配の関係から盛土に乗せられ、この土手が道路も兼ねて作られた可能性が考えられた。

盛土を含む基本的な層序は次のとおりである。I層（表土）；現道路。16cm、II層（盛土）；ブロック状のアカホヤ火山灰・褐色土・御池輕石混褐色土などアカホヤ火山灰層より上層の土を主体にアカホヤ層より下層のブロック状の硬質暗褐色土が交互に見られる層と黒褐色土主体の層とがある。旧耕作土の上に北西から南東へと傾斜または水平に堆積している。7.5～10.0cm以上、III層（旧耕作土）；黒灰色土。1.2～2.5cm、上下2層に観察されるところがある。いずれも4.0cm前後、IV層（自然堆積）；黒色土。5～17cm、V層（漸移層）；褐色土。8～23cm、VI層（アカホヤ火山灰層）；黄褐色土。9～33cm、VII層（いわゆるカシワバン層か）；硬質暗褐色土。1.2cm、VIII層；やや明るい硬質暗褐色土と続く。III層から下はほぼ水平に堆積しており、大正年間の耕地整理以前の旧地形を残しているものと考えられる。しかし、盛土に見られる遺物を含む褐色土層はこここの自然堆積層には見られず、南北数百mの土取りされた畑付近（西ノ原遺跡）には確認できることから、恐らくこの盛り土もこの方面から持ってきたものと考えられる。

以上のことから調査は、かつての包含層を主体とした盛土上層部分の遺物の収集に切り替えて実施した。出土遺物は、縄文時代から弥生・近世に至るもので、その主なものを図化した（第23～25図）。



第21図 七野第3遺跡周辺地形図 (1/6,000)

1 縄文時代の遺物

1～15は曾畠式土器である。器面調整はいずれもナデで、なかでも2～3、8～13は丁寧なナデ調整が施される。文様は、1の内面には列点状の連続刺突文が、2～3の内面には短沈線文による羽状文が、4の内面には縦方向の短沈線文が見られる。外面には、横方向の短沈線文の下に複合鋸歯文や斜線文などが見られる。また、4や13・14などの沈線文はごく浅いもので、14の器面には薄く貝殻条痕文も残る。15は推定底径約10.2cmを計る底部である。5には円形の焼成後穿孔が見られる。これらの色調は、主としてにぶい黄褐色～黄橙色で、5・9～11・15を除きススや炭化物等がわずかだが残る。

16は内面が割合丁寧なナデ、外面は縄文の上の粘土帶貼り付けと思われるわずかな肥厚帯に爪形文が見られる土器で、中期船元式に類似する。外面にススが付着。17・18は、文様がはっきりしないが単節の纏文あるいは無筋縄文が施されていると考えられる。色調は、にぶい黄橙～黄褐色を呈す。19～22は、無文土器の口縁部である。19は貝殻条痕文の上をナデ、にぶい橙色を呈す。20は貝殻条痕文調整で、ススが厚く付着している。暗灰黄色を呈す。21はナデ調整で、ススが付着し、円形の焼成後穿孔が見られる。黒褐色である。22はナデに一部貝殻条痕文が残る土器で、ススが付着している。にぶい黄橙色を呈す。23・24は無文土器の胴部片である。23は下部に、24は上部に粘土帶の接合面が見られる。ともにナデ調整で、外面にはススがわずかに付着している。にぶい黄褐色を呈す。25は内外面とも丁寧なナデもしくはミガキ調整と思われ、晩期の淺鉢形土器の胴部片であろう。にぶい黄色を呈す。26はナデ調整の底部片である。にぶい黄褐色～黄橙色を呈す。

37～41は縄文時代の所産と考えられる石器で、37はチャート製の石匙、38は黒曜石製の石鎌、39は砂岩製の尖頭器、40・41は砂岩製のスクレイバーである。

2 弥生時代の遺物

27・28は、中期と思われる壺形土器の刻目突帯付近である。いずれも突帯下にススが付着している。27は明黄褐色、28はにぶい黄橙色を呈す。29～31は、後期後半あたりの壺形土器の口縁部片であろう。29は短頸壺、30は櫛描波状文のある二重口縁壺、31は無頸壺である。にぶい黄橙色～橙色を呈している。32・33は壺形土器と壺形土器の底部である。

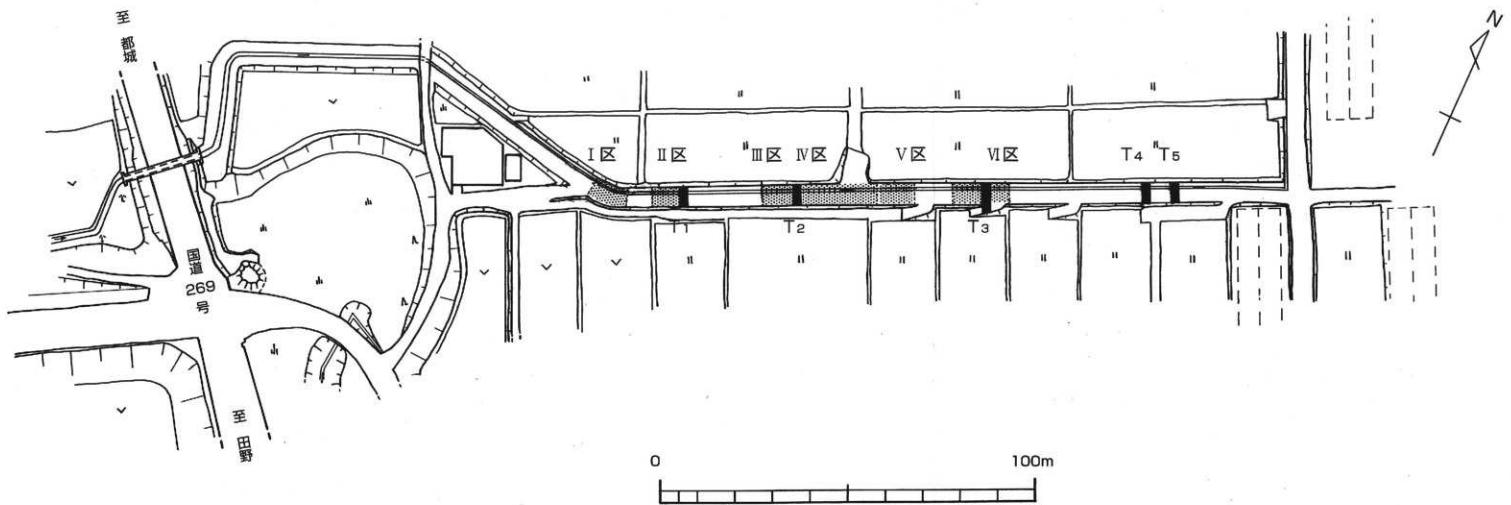
42は、この時代の所産と思われる頁岩製の磨製石鎌である。先端を欠く。

3 近世の磁器

18世紀以降の磁器を3点ほど図化した。34は碗の口縁部、35は露胎の染付底部（推定底径5.1cm）、36は高台蛇ノ目釉剥ぎの底部片（推定底径6.7cm）である。

3. 小結

今回の調査は、遺跡の周辺から搬入されたと考えられる客土中の遺物の採集であった。しかし、縄文前期の曾畠式土器がまとまって出土したほか、県内ではまだ出土例が少ない中期船元式系土器が出土するなど、いずれも貴重な発見例となった。



第22図 七野第3遺跡トレンチ配置図 (1/1,000)



T1 土層断面



T2 土層断面



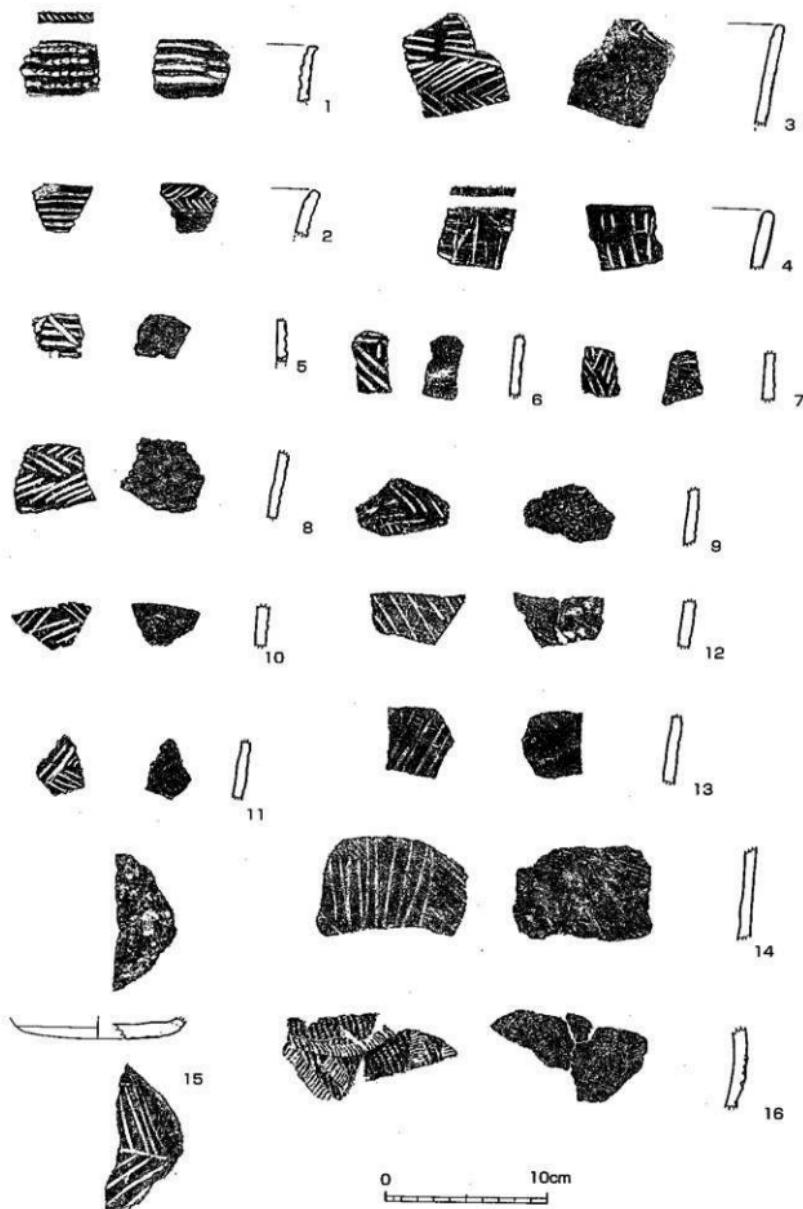
T3 土層断面



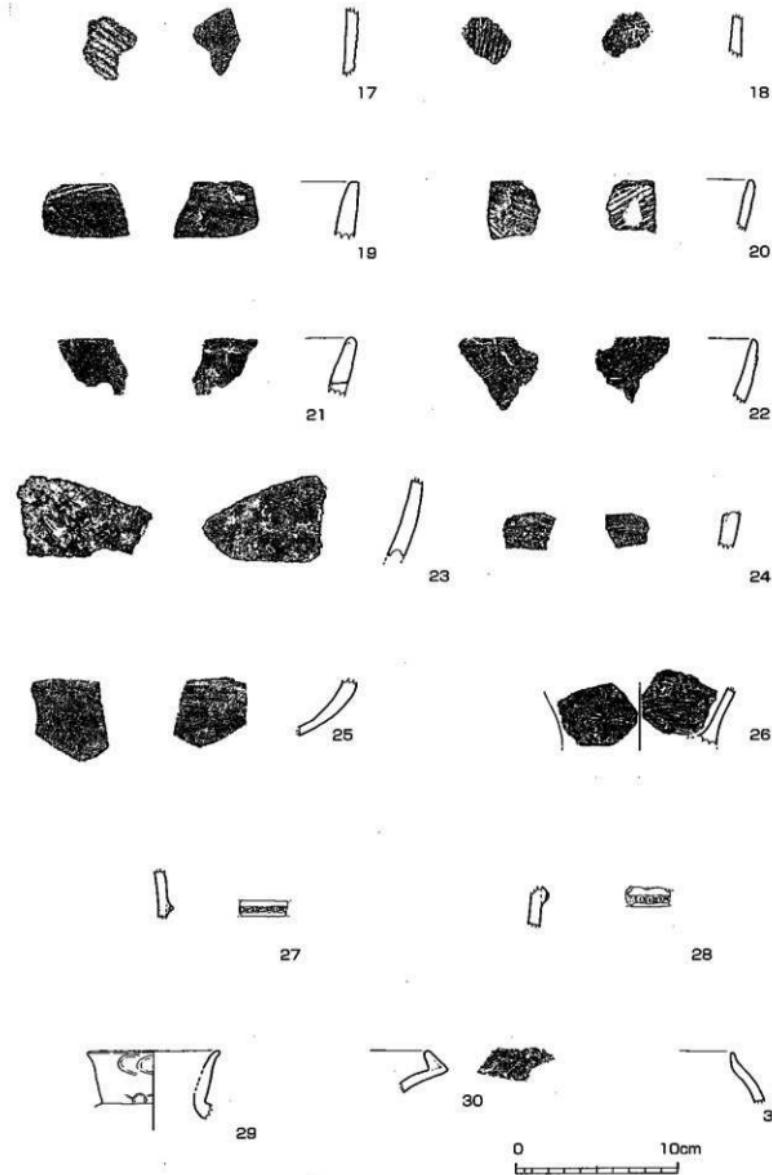
T4 土層断面



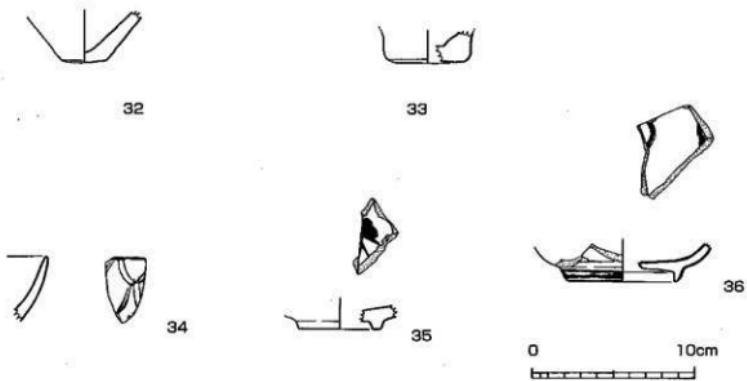
T5 土層断面



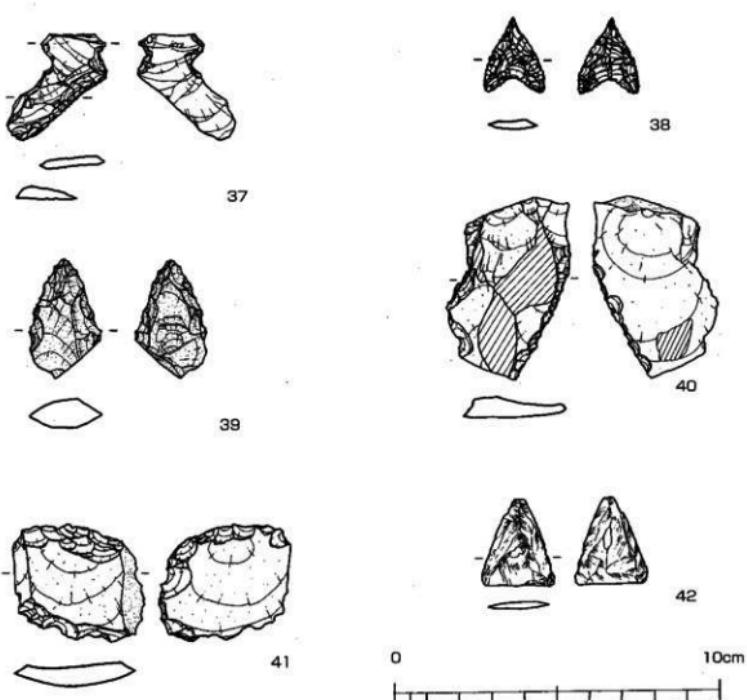
第23図 七野第3遺跡出土縄文土器 (1/3)



第24図 七野第3遺跡出土縄文土器・弥生土器（1/3）



第25図 七野第3遺跡出土弥生土器・近世磁器 (1/3)



第26図 七野第3遺跡出土石器 (2/3)



(1) 黒草第1・第3遺跡全景（北西から）



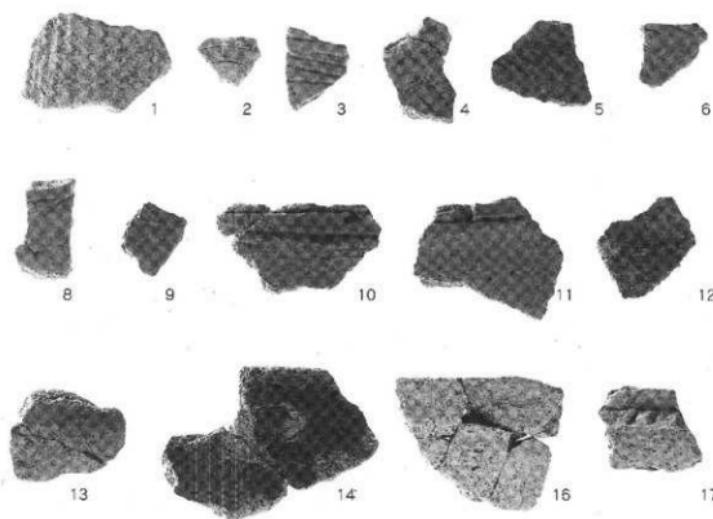
(2) 本野原遺跡調査区調査前全景（西から）



(1) 本野原遺跡調査区全景（東から）

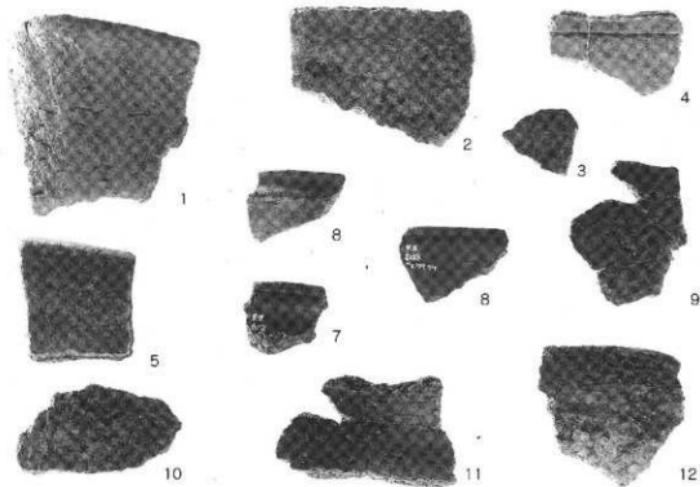


(2) 黒草第2遺跡調査区全景（西から）



(1) 黒草第1・第3遺跡出土遺物

(遺物番号は図1と同じ)



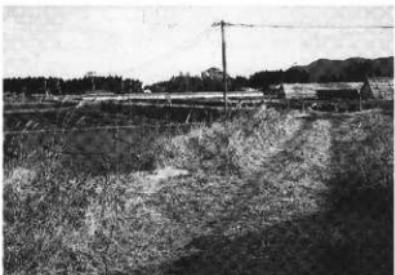
(2) 本野原・黒草第2遺跡出土遺物

(遺物番号のうち1~8は図
14と同じ。9~12は順に
図20図の1~4である。)

図版四



七号3遺跡調査前状況（南西から）



盛土の現況（西から）



調査状況（北東から）



調査状況（西から）



出土縄文土器 1~15

出土縄文土器 16~26



出土弥生土器・近世磁器 27~36



出土石器 38~42

報告書抄録

ふりがな	くろくさ	ものばる	しおの										
書名	黒草第1・第2・第3遺跡・本野原遺跡・七野第3遺跡												
副書名	国営大淀川右岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書												
卷次	第3集												
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書												
シリーズ番号	第24集												
編集者名	菅付和樹・石川悦雄												
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター												
所在地	郵便番号880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地												
発行年月日	2000年3月31日												
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因					
		市町村	遺跡番号										
くろくさ 黒草第1遺跡	みやざきけんみやざくらんのちょう 宮崎県宮崎郡田野町	45302	2008	31°49'2"	131°17'5"	1994 7.4~ 9.30 1994 1.10~ 2.7	3,000m ²	国営農業水利事業					
くろくさ 黒草第2遺跡	おおさかくろくさあざくらくさ 大字黒草字黒草		2009	31°49'2"	131°16'54"								
くろくさ 黒草第3遺跡	おおさかくろくさあざくらくさ 大字黒草字黒草		2007	31°49'2"	131°17'5"								
もとのばる 本野原遺跡	おおさかもとのあざもとののはる 大字元野字本野原		2006	31°49'2"	131°17'0"								
しおの 七野第3遺跡	おおさじのあざじののはる 大字七野字西ノ原		3027	31°49'49"	131°16'9"								
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項							
集落跡 包含層	縄文時代後期・晩期	溝・柱穴群	縄文土器（丸野式外）										

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第24集

**黒草第1・第2・第3遺跡
本野原遺跡・七野第3遺跡**

国営大淀川右岸農業水利事業に伴う発掘調査報告書 第3集

2000年3月31日

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212
宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
電話 0985-36-1171(代表) FAX 0985-72-0660

印 刷 株式会社 田中写真印刷
〒887-0031
宮崎県日南市戸高2丁目3番地5
電話 0987-22-5328 FAX 0987-22-5326
